

硬式野球部

部員数 : 3年生・7名、2年生・5名、1年生・6名、
マネージャー・1名 計19名

技術指導者 : 5名
(山崎 滋彦、黒滝 敏明、馬賀 大祐、大川 靖光、鎌原 彩)

トレーナー : 1名
(鍼灸師・本間 麻衣)

活動日 : 火曜日～金曜日 グランド練習
土曜日、日曜日 練習試合／グランド練習
月曜日 休み

テーマ : 『 変革 ～うまくなることをあきらめない～ 』

- 目指すチーム :
- ① 一生懸命に野球を楽しもうとするチーム。
 - ② うまくなることをあきらめないチーム。
 - ③ どんなミスをしても次の状況を考え、行動できるチーム。
 - ④ チームで勝つという目標に取り組めるチーム。
 - ⑤ 周囲の人から応援されるチーム。



春の地区予選 ～ 積み重ねたもの ～

3月、野球のシーズンとなった。練習を実践練習や練習試合にきりかえた。大会までの課題は、練習でやってきたことを練習試合でトライし、失敗することこそその失敗から技術をさらに向上させること、失敗した後の気持ちの持ち方、感情のコントロールだった。ゲームセットまで勝つためにチームで動くことがこのチームに一番必要なことだった。その課題を意識しながら、一日一日練習を積み重ねていった。練習試合では一方的な試合で惨敗することもたくさんあったが、選手たちはくじけそうになりながらも、あきらめずにその都度、感情のコントロールと技術の確認をしていった。

そしてついに3月26日、春の地区予選が開幕した。初戦は横須賀大津高校。選手たちの気持ちはあがっていたが、同時に異常な緊張感が高まっていた。試合がはじまったが、やはり選手たちの動きが硬く、いつもの動きができずにいた。案の定、いつもなら難なくとれていたアウトがとれずエラーが続き、失点を重ねてしまった。そして自分達の野球を十分に発揮できずに敗れてしまった。さらに次の日、県立横須賀工業との試合も同様に発揮できないまま敗退。選手たちはやりきれない想いでいた。ただ、どちらの試合もどれだけエラーをしても、どれだけ打てなくても、その度に次にやるべき事を互いに声かけを続け、走ってポジションやベンチに戻り、すぐに次の局面に備えようとしていた。ピッチャーもあきらめることなく最後まで自分のピッチングをしようと丁寧に投げている。これは、今までにはなかったことである。まさに練習を積み重ねた成果だ。

結果だけをみれば2連敗で地区予選敗退だが、彼らは緊張して普段の動きができないくらいこれまでの練習を頑張ってきたことを意味している。そして最後までやりきる気持ち。私は着実に成長していると実感した。また、人間的にも成長していると感じたうれしい瞬間だった。



第 97 回神奈川大会 夏の大会 ～ 歴史を変える ～

4 月、春の大会を終え、彼らは、目標を失いつつあった。新年度になり、顧問もグラウンドに顔を出す時間が極端に減り、平日の練習は自分達でおこない、土日で修正し、また自分達で練習をおこなう。彼らはそんな環境におかれていた。さらに、新入生が入部し、練習を教えるという役割も増えていた。当然、彼らだけでうまくいくわけではなかった。チーム内はネガティブな発言が目立っていった。チームの雰囲気も一つになりきれずにいた。練習試合も相変わらず、勝つことができない。それどころかある練習試合では今まで積み重ねた気持ちのコントロールもできず、観客や相手のチームのことばかり気になり目指している野球から離れてしまった。ついには完全に気持ちが折れてしまった試合もあった。

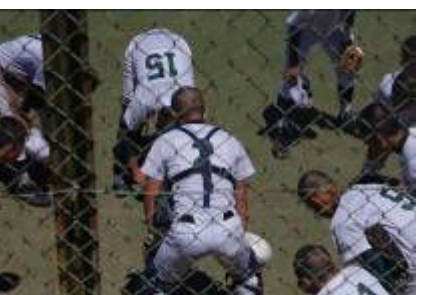
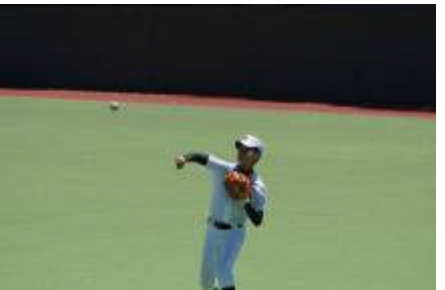
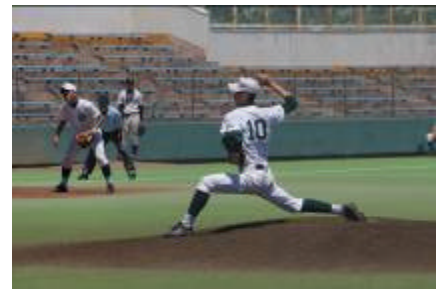
でも、しんどい練習を 1 年近く積み重ねてきた彼らは、自分を取り戻す術をもっていたのだ。そこからミーティングを重ねた。するとそれを境にだんだんとチームの士気があがっていった。練習試合も今まで一向に勝てない試合が続いていたのに勝ちはじめたのだ。明らかに格上のチームにも同等の勝負ができるようになっていた。練習の雰囲気もよく、いい声かけが絶え間なく飛びかうようになってきた。チームが一つになっていくのが日に日に実感できた。この雰囲気をつくったのは、選手達はもちろんチーム唯一の 2 年生マネージャーの役割も大きい。2 年生で唯一のマネージャーだ。マネージャーの仕事を一人でこなし、献身的にチームのサポートをしている。また、練習のサポートだけでなく、データを整理し、顧問に伝え、選手たちの気持ちの変化や練習の取り組む態度も客観的にとらえ報告を怠らない。時には選手の精神的ケアもおこなえる。そういった裏方の役割をしっかりとこなす存在がいたことも大きく影響している。ついに大楠高校の 15 年ぶりの夏の大会での勝利が近づいてきたのかもしれないと思った。歴史が変わるときだと彼らもモチベーションを高めていった。

平成 27 年 7 月 14 日、台風が去り、突然の夏到来、うなるような猛暑の中、大楠高校野球部は夏の大会をむかえた。1 回戦の相手は、関東六浦高校。会場は等々力球場。試合開始の 2 時間以上前に選手達は球場に集合していた。着替えが終わり、彼らはまず、緊張をほぐす為いつもの練習前に行くゴミ拾いをはじめ、そこから軽く体を動かし、更衣室に戻ってきた。しばらくして、ウォーミングアップのために移動した後の誰もいない部屋をみるとゴミ袋一杯に入っているゴミがいくつもあった。もう春の大会でみせた緊張で視野が狭く、ガチガチだった彼らではなく、どっしりと落ち着き、やるべきことをしっかりとわかっており、むしろ大会を楽しむ精神状態に入っていた。すっかり頼もしくなっていた。そして試合直前、スタンドをみると昨年以上に応援の生徒が大勢かけつけてくれていた。吹奏楽部やサッカー部、生徒会、有志の応援団の生徒たち、そして野球部の OB、先生、保護者の方々だ。100 名以上の方が応援にきてくれるチームになっていたのだ。これは、目指しているチーム像の一つだった。たった 19 名の野球部がこれだけの人達を動かすことができたのだ。彼らの努力がすでに報われた瞬間であった。彼らはこの大舞台で野球ができることに感謝をおぼえ、さらに集中力を高めていった。

いよいよ試合が始まったが、彼らはいつも以上の力を存分に発揮していた。ピンチになっても、堅い守備と投手の踏ん張りで粘りきり、4 回まで無得点に抑えていた。攻撃でも果敢に盗塁を試み、見事に決めチャンスを広げていった。ただ、最後の 1 本がはずれ得点を取りあぐねていた。そして、0 対 0 で 4 回裏ついにその均衡が破られ、1 点を許してしまった。いつもなら、そこから一気に大量点を取られるところをすぐに立て直し、後続を断った。6 回に入り、試合前の打ち合わせどおり、ピッチャーを交代した。これは 1 年間、言い続けていたことだった。今年のチームは 3 年生に二人のピッチャーがいた。先発ピッチャーが接戦で 5 回まで投げぬき、そのバトンに次にくす。これが理想のかたちであった。ただ、これまでの公式戦で一度もそのバトンがうまくつなげたことはなかった。どちらかが崩れる展開だった。しかし、この試合は、そうではなかった。守備の乱れが少し出たところで 2 点を許してしまったが、二人目のピッチャーも今までにないピッチングをみせ、しっかりと守り抜いていた。3 点を許してしまったが、予想以上の守備で彼らはしっかりと守り抜いていた。守りは順調であったが、攻撃で相手ピッチャーの力投により最後の 1 本がやはりでなかった。結局、最後まで得点をとることができず、3 対 0 で敗退。大楠高校野球部の夏は終わった。15 年ぶりの勝利にはならなかった。しかし、10 年以上

の間、9イニングを戦えたことがなかったのだ。間違いなく、今までの大楠高校野球部の歴史を変えたのだ。

試合が終わり、3年生の顔は晴れやかだった。おそらくすべてを出し切ったのだろう。それとは対照的に2年生は涙を浮かべていた。おそらく3年生ともう一緒に野球ができないことへのさみしさと負けた悔しさからだろう。しばらくして、彼らは応援にきてくれた大勢の方々にお礼を言うために球場の外で、チーム全員で整列し、3年生が一言ずつ、挨拶をしていった。最後にキャプテンがお礼の言葉を発した時、キャプテンの眼には涙があふれていた。それにじっと耐えながら堂々と挨拶をしている姿に応援にきてくれた方々は感動し、大きな拍手をおくっていた。これだけの人の心に入り込んだ野球部を誇らしく思えた。彼らは、高校野球を通して、様々なことにチャレンジし、達成し、ゆっくりだが着実にそれを積み重ね人間的な成長を遂げてきた。そんな彼らと野球ができたことに感謝したい。そして、大楠高校野球部の更なる歴史を大きく変えていける希望を抱いた。



新チーム始動 ～ 選択と決断 ～

平成27年7月17日全体ミーティング。3年生達の夏が終わり、1,2年生の新たなチームの夏がはじまった。彼らは3年生との別れに寂しさとこれまで支えてもらった感謝を胸に次の目標に向かって、前を向いていた。彼らの目指すチームは、①勝てるチーム、②応援されるチーム、③きびしさをもったチーム、④全員で勝負ができるチームである。これは、練習を積み重ねること、日々の中に決断と覚悟を積み重ねること。野球をやらせてもらえることへの感謝。日頃の生活態度、礼儀やマナーなどの心遣い。気持ちのコントロール、切りかえの早さ、気分屋からの脱皮。そして、all for one, one for allの精神をもつということだ。部員が12人しかいないチームが、1年後に目指すチームになっているか期待と不安で練習をスタートさせた。

最初の練習課題は、バットの振り込み、投げ込み、走り込みなどの基礎体力強化に絞った。12人しかいないチームにとって、一人欠けてもチームに大きな影響を与えてしまう。ケガや体力不足で練習や試合で十分に力を発揮できるようにするための最初の課題だった。また、彼らの中には、トレーニングや基礎練習などの上手くなっていくために避けて通れない練習を嫌がる選手がいた。そのため、最初にチームで勝とうとするための覚悟と決断を心にもつ期間でもあった。積み重ねは、まずは2日だった。2日練習して休養日をおく。これを繰り返した。やはりチームの不安どおり、練習にこなくなった選手や練習への取り組みが中途半端なまま時間を過ごす選手がでてきた。練習にこない選手には、くることを信じて待つしかなかった。しかし、中途半端に一日を過ごす選手には、まず今日を諦めて帰るという選択をさせた。このチームにとっての最初の決断だ。練習にはきてもらいたい。でも、今のままの彼らは目指すチームの方向ではない。だから目指すチームをつくる同志であることを信じる。キャプテン、副キャプテンはもちろんチームに確認をとりながら帰した。このまま練習にこなくなるかもしれないという不安も持ちつつも目指すチームのために信じて帰したのだ。次の日、帰った選手はやってきた。練習にきてくれたことが感謝だった。この決断を繰り返していくことが、彼らにはとても重要なことだと感じた。自分の決断を自覚し、次につなげること。間違えたと思ったら、また決断すればいい。それを積み重ねていくことをチームで決めた。8月に入り、猛暑が続く中、実戦練習など本格的な練習がはじまった。暑さのため、彼らの体力は短時間で一気に奪われた。士気も下がり、練習に取り組む態度が低下していった。

そんなある日、猛暑だが、激しい雨が合間に降り出した。練習はトレーニングと基礎練習に切り替えた。最初に5kmのタイム走。選手の状態を確かめながら、指導者達も一緒に走った。途中、脚の痛みがでて、気持ちがおれて、走ることを止めた選手がいた。もちろん痛みがあれば、走る必要はない。そういうチームの方針だ。だから、だれも咎める者もない。でも、彼はしばらくストレッチをした後、雨が降り出した中、走り始めた。指導者達はもちろん走ることを止めたが、残りの距離を走り切り、その後の基礎練習もすべてこなしていた。彼は以前に練習の途中で帰った選手だったが、今回は練習をすることを選んだのだ。彼だけではなく、そんな変化は他の選手にも少なからず芽生えていた。そんな決断を積み重ねていった彼らの気持ちは強くなってきていた。8月の中旬、練習には、11人が安定して参加していた。体調不良などで休む場合は、必ず連絡をしてきた。しんどい場面でも前を向いて練習しようという姿勢があらわれていた。誰かが、声をかけてひっぱり姿勢が見えた。間違いなくチームとして成長していた。そんな中、いよいよ練習試合で実力を試す時期に入った。結果は勝ち越していた。それ以上に前のチームから積み重ねて練習でやってきたことを、試合で失敗してもトライする姿勢がでてきた。試合をみてもやろうとしていることがわかった。彼らのプレイに意図が見え始めたのだ。だから、試合もスムーズに展開していく。もちろん気持ちの浮き沈みは多くある。でも、1つ1つ練習が身になっており、勝つためのチームのスタートをきりはじめた。実力は、まだまだかもしれない。でも、夢がまたつながれた。そんなチームになってきた。そんな彼らが秋の大会どんなチャレンジをするのか。また、その後、どのように決断するのか楽しみである。

